

カードファイト!!ヴァ ンガードG もう一人の 新導者

ドスメラルー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は歩き始める。挑戦し続ける三人に。

少年は誓いを果たす。孤独な愛しき少女に手を差し伸べるために。

少年は対峙する。人間らしい、愚かな男と。

これは、夢に向かって突き進もうと奮闘する、一人の少年の物語。

目次

プロローグ 約束	1
T U R N 1 噂	9
T U R N 2 すれ違い	18
T U R N 3 邂逅	36
ユナイテッドサンクチュアリ編 T U R	
N 4 合流と就任	78

プロローグ 約束

日中の陽射しがなりを潜めはじめ、夜の帳が間近のオレンジ色の空が見える頃。遠くではカラスの鳴き声や、豆腐屋の笛の音が聞こえるが、今は聞き取る余裕はない。

河川付近に、少年少女がそれぞれ向かい合いながら立っていた。

その幼い少年目には、涙が溢れており、しやくり声を上げている。

一方の少女は、女の子らしい服装をしており、苦笑しながら少年に歩み寄り、少年の涙をハンカチで拭く。

「ほら、そんなに泣かないの。男の子でしょ？」

「うう、だつてえ。」

尚も啜り声を上げる少年に、少女は微笑みながら話す。

「もう会えない訳じゃないんだから。また会えるよ、絶対。」

「ぐすつ、ほんとう?」

「うん。」

そう言つて、少女は持っていたハンカチを少年に持たせる。彼女の髪と同じ色のハンカチだ。

「・・・?」

「お母さんが言つてたの。自分のものを大切な人に渡すと、いつかまた会えるおまじないだつて。」

それをまじまじと見つめていた少年は、何か思い至つたのか。

「じゃ、じゃあこれ。」

「？」

少年はポケットの中からゴソゴソと取り出し、少女に渡した。

「これって……。」

それは以前、地元の祭り少年が射的で当てた玩具の指輪だ。よく少女雑誌の付録にあるものだが、そのコンセプトは、お姫様になれる指輪にらしい。

祭りで少女と別れた後に偶然見つけたもので、少年が少女の為に当てた景品だ。

「ほんとは、もっと早く渡したかったんだけど、こんなに遅くなっちゃって……。」

「……………」

申し訳なさそうにしている少年に目も暮れず、少女は手に持った指輪を見つめる。確かに、玩具の指輪。しかし、それは子供っぽいが、シンプルに作られたソレは、目立た過ぎず、さりとして地味でもない。

すると、少女の肩が震える。もしかして氣に入らなかったのか、おそろおそろ聞こうとした途端。

「ありがとうっ！大切にするね！」

花が咲くように満面の笑みを浮かべる少女を見て、少年は渡せて良かったと安心した。その顔は、さつきまで泣いていたときとは打って変わり、はにかんだ笑みを浮かべていた。

そろそろ帰る時間なのか、少年は少しずつ離れていく。

「明日のお引越し、ちゃんとお見送りするから！」

「うん！」

そうして、二人はまたね、と言い合い、帰路に着く。

少女は必死に走りながら、渡された指輪を握りしめていた。走るたびに揺れる髪の間から涙がながれていることに、誰も気づかなかった。

翌日、荷物を纏め終えたのか、少年の家族が少女の家族に挨拶する中、二人も話す。

「そろそろ、だね・・・」

「うん・・・」

お互い、別れを言いたくないのか、切り出せないでいる。

すると――

スッ

「え？」

「約束。」

少年は小指を出す。少女がそれに戸惑っていると。

「ぼくは泣かない。キミを守るように強くなる！」

それを悟ったのか彼女も小指を近づけながら言う。

「わたしも、がんばる！あなただけじゃなく、もつといっぱいの人に笑っていられるように！」

そうして、小指を出し、絡める。

その周りの時間が止まったかのように感じ、ゆつくりとその指をどちらかともなく離れていく。

そして、少年を乗せた車が走り出した。少年は後ろを向き、少女に手を振る。少女も大きく手を振る。お互い、姿が見えなくなっても振り続けていた。

二人の手にはそれぞれ渡したものが握られており、顔はこの青空以上に晴れやかだった。

また会うことを信じて疑わず。

二人が再開した時。それは、運命の悪戯か、それぞれの道を進みながらも、その道は交わっておらず、互いの立場は相反していることを。

この時の二人は、まだ知る由も無かった。

N
E
X
T

T
U
R
N

1

TURN 1 噂

噂、という言葉はある意味人に最も素早く流れるものである。

その真偽はどうあれ、「そういった」現象、出来事が起こり、または起こること誰かしらが第一目撃者となり、広がる。そしてあらぬ方向に進み、終いには都市伝説としても語られることにまで発展することもある。

その善悪も不明、且つ信じるも信じぬも人それぞれ。好意にもとれるし、悪意にも見える。そして、興味から当事者に成るもの。関係無いと切り捨て去るもの。

故に、噂とは人々の間で最も早く流れる。

TURN 1 噂

新導クロノがヴァンガードを始めて少し経つ頃。

今日もカードキャピタル2号店に顔を見せた彼をカムイは呼び止めた。

「実はなクロノ。お前も知ってるかもしれないが、一応話しておこうと思ってな。」

「何すか、藪から棒に。」

クロノが訝しげにする中、カムイが話し始める。

近頃、この町では色々な都市伝説があると言われていて、雪男ファイター、トイレのヴァンガード。口裂けファイターもあり、最近では仮面ゴーストというのものもある。

だが、カムイがこれから話すのは新たな都市伝説である。

「違法ファイター狩り、ですか？」

「そうだ。今普及協会が警察との協力の下、今力を入れて動き出している。」

カムイの話を要約するところだ。

近年益々ヴァンガードの普及が盛んになっている一方で、問題になっているのが違法ファイターだ。

賭博等の事案であれば警察だけで動けるのだが、近ごろは犯罪者達の手口が巧妙化している。

簡単に言えばファイトで賭け事をし、犯罪者組織や企業に流用されることもあり、ヴァンガードを悪用しているのだという。しかも、中には一般市民を対象にした悪辣な被害があるらしく、何件か届け出がだされている。

警察も捜査を進めているが、如何せん行き詰っていることが多い。

そんななか、突如彗星の如く現れたのが本題の違法ファイター狩りの出現である。一部のネット掲示板では目撃情報があるが、どれも審議が不明だ。

只、ハッキリしているのは、性別と特徴。そういう意味では仮面何某と似ているやもしれぬ。

その者は女性で、常に扇のような者を持っているという。そして、ファイトの腕もさることながら、その立ち振る舞いは優雅だと言われている。

「でも、何でそんな話を俺に？違法狩りなら寧ろイイ奴じゃないんですか？」

「まあ、それも含めてだ。お前は最近ヴァンガードを始めたばかりで、こういうことには疎い。シオンやトコハちゃんにも言っているから、念のためって奴だ。」

そういつて気さくに笑ってるカムイだが、改めて真剣な目で話す。

「ヴァンガードを悪用する奴らは許せねえし、何より純粹に楽しんでるのを嫌な思いをして、辞めたらもつと嫌な思いや噂が広がってしまう。だからこそ、こうして一人一人に声を掛けるんだ。」

「カムイさん……」

クロノの知る限りでは、葛城カムイは自分たちにアドバイスし、サポートしてくれる。その心は熱い人だ。本心から言っている。それに、先日自分の前に現れた銀髪の男も分らない以上、気を付けよう。

「分かりました。今後とも気を付けていきます。」

それを聞いてカムイは満足そうに頷いた。

町から少し外れた工業地帯の一角の廃工場。そこでは、二人がファイトしていた。

「クソッ、なんなんだこの女!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

茶髪のいかにも柄が悪そうな男は大量の汗をかきながら目の前の人物を見る。

金色のロングヘアにブラウン色の瞳。どこか浮世離れた服を纏いながらも、その少女は手札で口元を隠しながら自分のターンに回った。

「ストライド・ジェネレーション。神竜騎士 ザーム。」

男はダークイレギュラーズ、女性はかげろうを使い、現在はダメージが4対5で女性がりードしている。

「コール、トワイライトアロードラゴン、竜騎士イマード。ゴジョーのブースト、トワイライトアローでヴァンガードにアタック。ブーストしてアタックしたため、GB1発動。CB1払い、ヴェアウオルフ・イエーガーを退却。更にザームのスキル。他のスキルで相手のリアガードが退却した時、CB1払い、後列のドリーンを退却。」

トワイライトアローの火矢が複数放たれ、一つがヴェアウオルフを焼き、もう一つがヴァンガードに向かう。その一方でザームが武器を掲げるとドリーンを焼き尽くす。

「更にイマードのGB1。相手のリアガードが効果で退却した時、CB1払うことでパワー+2000、スキルを獲得。イマージがアタックした時、相手のガーディアンを一体退却させる。」

「くつ、だがCBは尽きた。これなら——」

「アエトニキのスキル。自分のカードの効果で相手のリアガードが退却した時、自身をソウルに入れることでCBCC（カウンターチャージ）。」

「くつ、ガード！」

「ザームでヴァンガードにアタック。」

「完全ガード！」

「トリプルドライブ・・・ゲット、クリティカルトリガー。効果は全てイマードへ。」

「く、くそ・・・」

男の手札は3枚。イマージのスキルではガード値が足りない。

「カラミティのブースト、イマージでヴァンガードにアタック。」

イマージの剣がブレイドウィングを切り捨て、消えていった。

「う、嘘だろ・・・」

ドサリと垂れこむ男に構わず女性はデッキを仕舞い、扇を広げる。

「チェックメイト、ですわ。」

そこには詰めと書かれていた。

（さて、お仕事お仕事。）

「……そうか。引き続き続けてくれ。」

所変わってユナイテッド・サンクチュアリ支部。銀髪赤目の青年、伊吹コウジは電話を切った直後、再び着信が鳴る。今度はSNSだ。

状況終了。

例の組織との繋がりがアリ。

引き続き調べを進める。

それを見て一瞬眉をひそめた後返信し、事務書類の続きを始めた。

こちらでも交渉は進めている。

いずれ表舞台に出ることも視野に入れておけ

その人物の正体を知るのは、まだ先の話・・・

TURN 2
すれ違い

会いたいときに、特定の人物と出会えない。ツイてないとも言う。

事情はどうあれそういったことは事前に連絡を取れば解決するが、今回はアポなしだ。

こういった事態では、どうしようもないこと。

TURN 2
すれ違い

安城トコハは残念な思いでいっぱいだった。

今日はドラゴンエンパイア支部の手伝いや学校の委員会もないため、ヴァンガードを覚え始めている友達岡崎クミとカードキャピタル2号店に行こうと計画していたが、彼女は用事があり、一人で来た。

仕方なく、最近出入りが多く未知のギアクロニクルを使う新導クロノの様子を見に行くとついでにファイトしに行こうと考え向かった。

扉を開けると、カムイが条例の挨拶をし、店内を見渡すも――

「あれ？新導来てない・・・（それに・・・）

トコハが辺りを見渡していると、

「ああー、タイミング悪かったな。ちょっと前まで来てたんだが、用事があるって言っていつちまったんだクロノはもうそろそろ来ると思うよ？」

カムイの言葉を受け、ツイてないと思った。

トコハがクロノじゃないもう一人の事を言っている人物は、彼女と同じ中学に通う生徒だ。

といつても、クラスは違うし、今日はクミと話していたため、会っていない。

きつかけは、ドラエン支部の手伝いをしていた時、人手が足りないと思い依頼を出し

た際にその人が引き受けてれたのだ。その際にヴァンガードファイターであることを知り、手伝いを終えた後ファイトをした。

只、そのファイトをする過程となった、ある出来事が起因していた。

安城トコハは、ある一種のコンプレックスを抱えている。ドラエン支部所属にして、かげろうの克蘭リーダーを務めている尊敬する兄、安城マモル。

ヴァンガードを教わり、楽しさを学び、そして、嫌な感情を覚えた。

そういった彼女の心象を垣間見させることがあった。

ビラ配りの際、偶然来客の一人が安城の名前から妹であることを知り、今度開催される地区大会に出場することを聞いてきたのだ。

彼女はそれをやんわりとだが否定し、尚も聞いてこようとする客をあしらう形で行先に催促させた。

その後、それをその人に偶然見られてしまったのと、休憩時間だったのもあり、気が付くと愚痴っていた。

幼少の頃は、只々楽しかった。学校から帰れば、ファイトに打ち込み、負けて悔しい思いをしても、反省会を開いている時も、デッキの調整も、思い出の詰まったものだ。

しかし、近ごろはマモルの人気と知名度から、周囲の目も強くなり、学校以外では「安城マモルの妹」としてしか見られなくなっていた。

勝つても安城マモルの妹だから、負けても安城マモルの妹だからと、好奇心と不躰な視線、心の無い言葉に彼女の心は軋む一方だ。

どんなに言い繕っても、彼女を個人として見られない。枷を嵌められた鳥のように、表面的な。

何時しか彼女は、ヴァンガードの楽しさを、トコハ自身も分からなくなってしまった。

気丈に振る舞っても、もがくことも苦痛に感じる。

そんなことを、何故かその人に話してしまった。

疲れてしまったのか、それとも気を許せると思ったのか、後になっても分からない。

それで少し気が紛れたのか、気分転換も兼ねてファイトをした。

ファイト後、一息吐いた際、唐突にその人は言った。

『ファイトをしていた時、君は凄く生き生きとしていた。心の底から楽しんでいる。一回一回をかみしめるように、それでいて、清涼なイメージ。君のお兄さんが教えているのが、良く分かる。』

その言葉に戸惑いながらも、思わず怯えてしまうも彼は続けて話した。

『どんなに周りから言われても、それは関係無いと思う。きつと、これからもそう見られることもあるけど、その中で見つけて行けばいいと思うよ。君の『安城トコハを。』

ハツと思う。その人から見れば間拔けな顔をしていただろう。

『それでも何かあるなら、また何時でもファイトしよう。迷いも悩みも、抱え過ぎずに分散すればいいよ。』

ね？と言う姿に最初は呆気にとられていた彼女も理解したようで、言葉には言い合わせない感情があつた。

決して不快ではなかったのもあり、頷いた。

その後、時々カードキャピタルにも顔を出していることから学校でも話すことが多くなり、ファイトの回数も増えた。クミも見知っており、以前より楽しくなった。

（あーあ。またファイトしたいなあ）

季節は春なのに彼女の心はまだ蕾。芽吹くにはまだ時間がかかりそうだ。

しかし、その姿は以前よりも心なしか吹っ切った部分も強い。

その後、2号店に来たクロノにファイトを挑んだのは言うまでもあるまい。

ここは倉庫街。海から運ばれてきた物資を納め、個人又は企業が持っている。その一画にて、例の金髪ファイターがファイトしていた。

「へっ、ダメージは3対5。手札も十分。たくよお、石本の馬鹿も何でこんなお嬢ちゃんなんかを負けてんだよ」

ブツブツと言っている目の前の男、犬山はそう言いながら嘗ての知り合いの男の顔を浮かべているのに対し、金髪ファイターは黙々と整理している。

「第一、こんなお嬢ちゃんが『ハンター』な訳ないだろう。冗談も大概にしろってんだよ、なあ?」

盤面は確かにひどい。ハンターの盤面はバッドエンド。ドラッガーと後ろの指揮官
ゲイリー・キャノンのみ。

対して犬山はデトニクス・ドラゴンにインターセプトが2体。手札も8枚ある。

「なあなあ、お嬢ちゃん。もう決着ついたんだし、潔く負けないか？これ以上見てられな
いんだよねー」

言葉とは裏腹に下品な笑みを浮かべる犬山。

「フフ……」

優雅に微笑むハンターに犬山は訝しげに見る。

「これで、勝ったつもりでいる、と。ミスター犬山。あなたのその状況判断の足りなさ、
視野の狭さ。……愚かですね」

スタンド&ドローしながら告げていく。

「スパイクブラザーズの真骨頂、見せて差し上げます。ブレイクライド。ブラッディー・オーグル」

ブラッディー・オーグル pow11000

「ブレイクライドスキル。ヴァンガードにパワー+10000、スキルを獲得。コール、サイレンス・ジョーカー、フローズン・オーグル」

サイレンス・ジョーカー pow4000

フローズン・オーグル pow9000

「トリガーまで呼び出した・・・？」

「これが答えです。シークメイト」

ドロップゾーンから4枚選び、山札に戻し、一枚のカードが彼女の手許に導かれる。

「駆け抜けなさい、全てを打破する双頭の鬼。レギオン。フローズン・オーグル」

「ハッ、レギオンしたからなんだってんだよお」

未だ状況を理解していないのか、嘲笑う犬山に、彼女は絶望を突きつける。

「ではご説明しますと、バッドエンドのブレイクライドによつてリアガードがアタック時、パワー＋100000。アタック終了時、山札に戻る。ブラッディー・オーグルは同じスキルで50000アップ。そして、」

スツと目を細めながら続ける。

「フローズン・オーグルはアタック終了時、ヴァンガードがレギオン状態ならば、コストを払うことで、山札からスパイクブラザーズの好きなユニットをスペリオルコールできます」

「はっ……え……?」

笑みが凍り、徐々に青くしていく犬山に、微笑むハンター。

「お分かり頂けたでしょうか?」

口をパクパクしているのを無視し、バトルフェイズに入った。

「では、一打目。サイレンス・ジョーカーでヴァンガードにアタック。バッドエンドオーグルのスキル。パワー+15000、合計15000」

「ハッ、(どうする? 何処を防げば……)」

怯えながら、震えた手で確認しだす。

「く、クソッ、ノーガード!」

4 点目『魔竜戦鬼 チャトウラ』

トリガー無

「クソツ・・・」

「サイレンス・ジョーカーはスキルで山札に。続いてフローズン・オーグルでヴァンガードにアタック。バッドエンドオーグルのスキルでパワー＋15000、計24000」

「どのみち防ぐ理由はねえ、ノーガード!」

5 点目『毒心のジン』☆

「へ、へへ。やったぜ、効果は全てヴァンガードだ!」

「その強がりも持ちましようか? フローズン・オーグルのスキル。CB1、自身をソウルに送ることで、山札から3枚目をスペリアルコール。第三打。パワー＋15000」

「ガード！『毒心のジン』」

「フローズン・オーグルのスキル。コストを払い、4体目のフローズン・オーグルをスペリオルコールし、アタック。パワー+15000」

「ガード！『魔竜仙女 セイオウボ』こ、これでフローズン・オーグルは尽きたー！」

「ええ、ですが。フローズン・オーグルのスキル。コストを払い、山札からシルバー・ブレイズをスペリオルコール」

シルバー・ブレイズ power 9000

「シルバー・ブレイズでヴァンガードにアタック。スキルで+15000。更にアタック時、シルバー・ブレイズのスキル」

「ま、まだあんのかよおっ!？」

「シルバー・ブレイズはヴァンガードにアタック時、ヴァンガードがレギオン状態ならばSB1払うことでパワー+10000。例によって山札に戻りますが、まあ省きで宜しいでしょう。これで計34000です」

「んなっ!?クソ、ガード! 『スパークエッジ・ドラコキッド』、『オールド・ドラゴンメイジ』インターセプト! 『サンダーストームドラグリーン』」

「アタック終了時、シルバー・ブレイズは山札に戻ります。では、これが本命です。ゲイリーギヤノンのブースト、ブラッディー・オーグル、フローズン・オーグルでレギオンアタック」

「へ、へへへ。残念だがここまでだぜ! ドラゴンダンサー・アナスタシアで・・・!」

「アタック時、ブラッディー・オーグルのスキル発動。CB2、手札一枚をソウルに入れることで、山札からスパイクブラザーズをスペリオルコール。シルバー・ブレイズを選択」

「は……う、嘘だろ……?」

絶望顔の犬山にハンターは美しくも残酷に言う。

「貴女の今の手札。そして、次のアタックも考慮に入れば……どうなりますかね?」

「ッ、か、完全ガードオオオオオ!! 『ドラゴンダンサー・アナスタシア』 コスト 抹消者 ボーイングソード・ドラゴン

二頭の鬼の突撃はアナスタシアの舞によって阻まれる。

「ツインドライブ 『サイレント・ジョーカー』、『ソニック・ブレイカー』 ダブルクリティカルトリガー。効果は全てシルバー・ブレイズに」

「……!……!!!」

声にならない叫びが聞こえるが、彼女には調律にしか聞こえない。

「終わりです。シルバー・ブレイズでヴァンガードにアタック。バッドエンドオーグルと自身のスキルで25000。計44000」

犬山の手札は2枚。デトニクス・ドラゴンと魔竜仙女セイオウボ。そしてインターセプト一体。ヒールも2枚。例えダブル6点ヒールを決めても防げない。

まさに、バッドエンド。(グッドエンド)

そのまま身動きを取らないデトニクスにシルバー・ブレイズは駆け抜け、強烈なタックルをかまし、吹っ飛んで行った。

6点目『ドラゴンダンサー・アナスタシア』

「勝負あり、ですね」

デッキを片付け、未だ俯きながらぶつぶつ呟いている犬山に話す。

「なぜだ……何故」

「色々言いたいことはありますが、何よりも間違っているのならば」

それは、と言いながらバサツと『慢心』扇を開き

「その姿勢。少なくともファイターの風上は愚か、人間としても酷いものです。生まれなおしてきなさいな」

その言葉を最後に、犬山は某ボクシング漫画のように真っ白になった。

「さて、お話を聞かせてもらいますよ、Mr, 犬山」

工場から声が響く中、天は尚も青い。

TURN 3
邂逅

今日も晴れる青空が澄渡る空とは裏腹に、暗がり広がるどこかの路地裏にて少年と仮面の男が向かい合っていた。

少年は小学生くらいで少し怯えた表情をしていて、対峙する男は仮面で顔を隠していた。

この男こそ、今ファイター達の間で噂になっている仮面ゴーストだ。

『クックック。早速ファイトをしようじゃないか』

「う、うう・・・」

その姿と得体の知れなさが恐怖を生み、少年は縮こまってしまった。

しかし、逃げることは許されていない。

『もしも、逃げたいというなら、君の分身を置いていくといい。クックック・そんなこと、出来ないよねえ？』

「ツ．．．」

思わず自分の分身を思い出し、青ざめた表情になりながらも、気丈に見据える少年を嘲笑うかのように楽しんでいる。

引いても、引かなくとも、少年の顔は絶望で染まる。

これまでに手に入れた分身は12枚。仮面ゴーストは何かを待ちわびているのか、カードを取り続ける。

だが――

「ようやく、お会いできたわね。真昼のコソ泥さん？」

ユラリ、と空間が歪んだかと思えば、そこには既に人が立っていた。

そう、ハンターだ。

「えっ!? い、いったい何処から・・・」

『ほう・・・』

少年は驚きに満ち、仮面ゴーストは感嘆の声を上げながらも、ハンターは構わず近づく。

「初めまして、仮面ゴースト。私は通りすがりのファイター。不便であれば、ハンターで結構ですよ。」

『これはこれは……まさか巷で有名な方とお会いできて光栄ですよ、ミスハンター。』

しかし、と続けながら疑問を投げかける。

『貴女は主に違法ファイターを中心に相手にしていると聞いたが。宗旨替えですかね』

「フフ、まさか」

バツと扇を広げると「愚問」と書かれている。

「確かに、私主な活動は強ち間違つてはいません。ですが、それよりも我慢が出来ないのが、」

スツと目を細め、数度下がった声音で言い放った。

「貴女の所業が、あまりにも酷いことから、ですね。」

その視線に少年は震え、仮面ゴーストもピクリと身じろぎしながらも内心では驚いている。

「私とて一ファイター。どんな目的にせよ、ファイターで語るこそ学び、新たなイメージへ、未来へとつながると信じています。ですが」

「貴方からは、それが感じられない。」

「私が相手を為さってきた方と同等。いえ、若しくはそれ以上に性質が悪いかもしれない。」

「貴方が行っているそれは、ファイトとは呼べぬもの。」

「そして僭越ながらも、貴方にファイトを通して教えて差し上げようと思います。……貴方がこれ迄集めたものをお返しつつ、ね。」

優雅、且つ冷たい声でつらつらと言葉を並べたてるのを、止める者は居なかった。

『フ、フフフ。であるならば、賭けていただきましょうか。その少年にも話したが、私には12枚の分身を握っている。私の要求は二つ。貴女の分身。返却したいのであれば、12枚のトリガーを抜いて貰おうか』

その言葉に少年は再び恐怖の表情を浮かべるが……

「こちらにありますわ」

懷からカードホルダーを取り出すと、そこには11枚のカードが在る。

しかも、どれもグレード3。

『これは……まさか……!』

「お察しの通り、この12枚が私の分身、と言いましたら納得されますか？」
愉快そうに微笑むハンターに構わず、仮面ゴーストは調べ始める。

グランブルー 死海の呪術師 ネグロボルト

バミューダ△ Duo 魅惑の瞳 リイト

なるかみ 喧嘩屋 ビッグバンナックル・バスター

かげろう ドーントレスドライブ・ドラゴン

ネオネクター リコリスの銃士 ヴェラ

ゴールドパラデイン 月影の白兔 ペリノア

ロイヤルパラデイン ナイト オブ シンセリテイ

リンクジョーカー 星輝兵 インフィニットゼロ・ドラゴン

ノヴァグラツプラー メツチャリーダー・レイバード

デイメンジョンポリス 創世英雄 ゼロ

スパイク・ブラザーズ バッドエンド・ドラツガー

計11。一枚足りないと聞こうと見ると、いつの間にか彼女の右手にはデツキが握られている。

「そして、これから貴方と雌雄を決するデツキ。この分身を入れて12。申し分ないでしょう?」

確かにそうかもしれないが、違うそうじゃない。

何でそんなにデツキを持ってるんだとか、本当に分身なのかとか、そもそも使ってるのかとか。

思わず混乱してしまうゴーストと少年。

結局了承された。

「下がつてて、少年。貴方はこのファイトを見届けてほしいの。」

「えっ!?!」

目をパチクリさせる少年にハンターは説明する。

「学校でも習ったでしょう？ 約束はある物つて。私とこの人の賭けたことの証人になってくれるかしら？」

「う、うん！ お姉さん！」

少年は大きく頷いてそう言ったが、寧ろハンターは少し硬直後、何故か少し沈んだ空気でファイトの準備をする。

『では、始めようか。エト・ヴ・プレ？』

「ウイ。いつでも」

『『スタンドアップ！ ヴァンガード！！』』

『俊英の解放者 ウォルティメール』 p o w 5 0 0 0

「アモンの眷属 フェイト・コレクター」 p o w 5 0 0 0

舞台はユナサンの訓練場。

二人は静かに競い始めた。

シオン s i d e

綺場シオンは、生まれつきすべてを持っていた。

頭脳、カリスマ性、運動神経。

父親が経営する日本最大企業、綺場H Dの仕事の一旦を任され。更には学業、習い事

と過密スケジュールだ。

しかも、それを鼻にしない、正に理想の人物であり、レディからすれば白馬の王子そのものだろう。

その綺場シオンは今、全力で走っていた。

今日、本来は習っているフェンシング教室に、教会からの視察があるにも関わらず、彼は投げ出してきた。

それは、シオンが家や、学業、習い事に以上に情熱を向けていることの件。

ヴァンガードだ。

しかも切っ掛けとなったのは、先日から多発している仮面ゴースト事件だ。

当初、シオンはこの騒動とは別に件のハンターの搜索も考えたが、彼女が現れるのは旧市街や町はずれが多いこと。また、対象が違法ファイターであることから、危険性と

リスクを考え除外した。

？

何よりも、彼の携帯からメールが届いたのだ。

まるで、犯行予告かのように。

それを見た瞬間、先日会った少年の笑顔が浮かび、いてもたっても居られず、飛び出していた。

（頼む・・・間に合ってくれ・・・！）

わずらわしく思いつつも、我武者羅に走る。

今の彼は綺場の御曹司として、何より１ファイターとして彼の安否と正体を突き止めるのみ。

そうした彼の純粋な心と行動が、後々に災いとなることを、彼は知らない。

s i d e o u t

「・・・・・・・・・・」

（フム。ここまでは目立って何もして来ないな。）

現在、4ターンが終わり、ハンターのターン。ダメージは2対1でゴーストがリード。
未だに彼女の意図が掴めないのと、妙に嫌な予感しかしない中、彼女はライドフェイズに入る。

「ライド。魔界侯爵 アモン」

魔界侯爵 アモン p o w l o o o o

『アモン……』

彼女がライドしたのは、アモン。

チームAL4のメンバーにして、ジェネラルの異名を持つファイター、新城テツの分身だ。

「コール、アモンの眷属 フウ・ジンリン、アモンの眷属 ヘルズドロー。スキル発動。ヴァンガードがアモンなら、二枚SC」

『アモンの眷属 ヘルズデイル』、『悪夢の国のダークナイト』

アモンの眷属 フウ・ジンリン p o w 7 0 0 0

アモンの眷属 ヘルズ・ドロップ 9000

「ヘルズ・ドロでヴァンガードにアタック。『ガード。『霊薬の解放者』フウ・ジンリンでヴァンガードにアタック。スキルでパワー+3000。『ノーガード。『解放者ローフル・トランペッター』コレクターのブースト、アモンでヴァンガードにアタック。アモンは私のターン中、ソウル一枚に付き+1000。よって6000。』」

『ノーガード』

「ツインドライブ 『魔界侯爵 アモン』、『アモンの眷属 ヘルズトリック』ヒールトリガー。ダメージ1回復。パワーはヴァンガードへ。」

アモンの腹の目からビームを放ち、ローフルは吹き飛ぶ。

ゴースト3点目 『希望の解放者 エポナ』

「フェイトコレクターのスキル。6枚以上ソウルにあり、ブーストしたアタックがヒット時自身をソウルに。一枚ドロ。これで、ターンエンド。」

『では、そろそろ答えを教えて貰おうか。』

ハンターは小首を傾けながら

「はて、答えとは一体。」

そう言いながら手札で口許を隠す。

『此処まできて、惚けるのも大概にしてくれ。』

『私の正体を、知っているのだろうか？』

「・・・・・・・・」

ハンターは身動き取らずゴーストの次の言葉を促す。

『是非、聞かせてもらいたい。何故、ここに來たのか——！』

言葉の途中で此方に向かつてくる駆け足が聞こえ、振り向くと。

「間に合ったか・・・！」

金髪の貴公子然とした少年、綺場シオン。

「あ、昨日のお兄ちゃん！」

「リヨウタ君無事かい？」

リヨウタと呼ばれた少年はコクンと頷くのをホッとひと安心するのも束の間、二人の視線が集中する。

『やあ、来てくれたようだね。綺場シオン。』

「ゴースト・・・それと、」

「初めまして、ミスター綺場。しがなひ者ですので、ハンターとでもお呼びくださいまし。」

それぞれ挨拶するも、シオンは一度女性を見てからキツとゴーストに目を向ける。

「いい加減、正体を明かしたらどうなんだ、ユウヤ！」

その言葉に反応してゴーストの体が震え、笑い始めた。

そして、

「はぁー。やれやれ、来るのが早ければ君を叩きのめせたんだけどねえ。」

外套を脱ぐと、顔立ちはシオン同様整っているが、その顔は性格なのか分からないが、相手を見下す歪んだ物を持っている。

「そう、僕がゴーストの正体。驚いたかな、お嬢さん。」

「成る程。烏森家の。随分と派手に動いていたこと。」

それぞれ感想を言うなか、シオンが目的について問うと。

「ああ。目的なら半分は達成している。何せ、君が釣れたんだからねえ。」

ギリツと怒りに伴う歯ぎしりをするシオンと信じられないと顔で表す少年を愉快そうに嘲笑う。

「本来ならそれで良かったんだけどね。まさかイレギュラーが居るとは。」

やれやれと困り顔でハンターに首で指す。

そう、ユウヤにとってシオンをフェンシングの視察から遠ざけ、次いでにファイトで打ちのめす。それが本来のシナリオだった。だが結果としてそれは達成されなかった。

「おあいにく様。そんなつもりでいた等露とも知らず、ごめんあそばせ。」

ちつとも悪びれを見せず、どこまでも真意を探らせない声音と発言にもユウヤは鼻息荒くするよう笑う。

「なあに、心配せずとも終わらせてあげよう。スタンド&ドロ。ライド！軌跡の解放者 アスクレピオ！」

軌跡の解放者 アスクレピオ power 1000

「コール！ローフルトランペッター！五月雨の解放者 ブルーノ！さあ、そんなヴァンガード諸とも吹き飛ばしてくれるわ！」

「ウォルティメールのブースト、アスクレピオでヴァンガードにアタック！ウォルティメールのスキルでパワー＋3000！」

「ノーガード。」

「ツインドライブ！『軌跡の解放者 アスクレピオ』『剛刃の解放者 アルウィラ』クリティカルトリガー！パワーはローフルに、クリティカルはヴァンガードに！」

アスクレピオの剣撃がアモンを襲う。

ハンターのダメージ2、3点目『アモンの眷属 フウ・ジンリン』、『ヴェアウオルフ・イエーガー』

「そろそろ！ブルーノのブースト、ローフルでヴァンガードにアタック！」

「ガード。『アモンの眷属 ヘルズトリック』」

「防いだか。まあいい、これでターンエンド。」

「は、激しい」

（問題は、次のターンでユウヤは双闘してくる。彼女はもう切り返す。）

「スタンド&ドロ。手札のアモンをコストに、ストライドジェネレーション。ヒートエレメント マグム」

ヒートエレメント マグム POW 16000 + 10000 = 26000

ハンターがライドしたのは、クレイエレメンタル。どのクランにも属している未知のクラン。

「この俺に効果無し of G ユニットとは。随分舐めたものだな。」

「まさか。私は至って真面目ですよ。それとも、何か文句でも？」

怒気を含んだ顔と声にハンターは涼しげに返す。ユウヤは不服そうにフンつと返すのみだ。

「では、フウ・ジンリンを後ろに。コール、アモンの眷属　ロン・ジンリン。ドリーン・ザ・スラスター」

アモンの眷属　ロン・ジンリン P o w 9 0 0 0

ドリーン・ザ・スラスター P o w 6 0 0 0

「ドリーンのブースト、ヘルズドロでローフルにアタック「ガード。『剛刃の解放者アルウイラ』」マグムでヴァンガードにアタック」「ノーガード」

「トリプルドライブ『アモンの眷属　ブラド・スペキュラ』、『アモンの眷属　クルーエルハンド』クリティカルトリガー。クリティカルはヴァンガード。パワーはロンジンリンに。サードチェック『ヒステリック・シャリー』ドロートリガー。パワーはロン・ジ

ンリンに。」

マグムの操る炎でアスクレピオは燃え焼かれる。

「フン、無駄な足掻きを。ダメージチェック『王道の解放者 ファロン』、『靈藥の解放者 エリクサー』ヒールトリガー！ダメージ回復。パワーはヴァンガードに。」

「フウ・ジンリンのブースト、ロン・ジンリンでヴァンガードにアタック。スキルでパワー+30000」

これもガードを選択。4点目はマロン。

「あつははは！所詮ハンターなどと呼ばれている君でもこの程度か。弱いなあ？」

ユウヤの耳障りな言葉が響く。

「分かるかいお嬢さん。俺がカードを奪っていったのは、自覚することさ。」

「・・自覚？」

「そう、自覚さ。古来より、弱者の庶民は支配者である王に恐れ、怯え、平伏す。それと同じさ。」

心底樂しげにユウヤは話すのをシオンとハンターはジツと聞いている。

「それを庶民共に徹底的に分からせてやるのさ！この僕が！烏森の人間として試してるのさ！」

「下らない」

心底そう思うように吐き捨てるシオンに一瞥するとユウヤはスタンド&ドロースる。

「君も俺に敗れていった奴らと同じ末路に立たせてやる。シークメイト！」

『希望の解放者 エポナ』×2 『剛刃の解放者 アルウイラ』 『霊薬の解放者 エリクサー』

「行くぞ！ 双闘！！王道の解放者 ファロン！」

アスクレピオ×ファロン power 1000 + 9000 = 20000

「ローフルトランペッターのスキル！CB1払い、山札の上から4枚まで見て、解放者のユニットをスペリオルコール！来い、ヨセフス！」

疾駆の解放者 ヨセフス power 7000

「スキル発動。ESB1払い、一枚ドロ。更にブルーノのスキル！山札から解放者が登場したため、パワー+3000！アスクレピオのスキル双闘状態で解放者が4体以上なためパワー+5000、クリティカル+1！そして王道の解放者 ファロンをコール！」

王道の解放者 ファロン power 9000

「さあ、絶望しろ！ウォルティメールのブースト、アスクレピオ、ファロンでヴァンガードにレギオンアタック！ウォルティメールのスキルでパワー+3000！」

計33000だ。

「完全ガード『アモンの眷属 ヴラド・スペキュラ』コスト『ヒステリック・シャリー』」

アスクレピオとファロンの攻撃はヴラド・スペキュラの厚いシールドで防がれる。

「まだだ！ツインドライブ！『希望の解放者 エポナ』、『剛刃の解放者 アルウィラ』くっくっく、ダブルクリティカルトリガー！効果は全てファロンに！」

「ここにきて、ダブルクリティカル。」

「ま、不味いよ。」

険しくなるシオンに、泣きそうになるリョウタ少年。

そんな中でも、ハンターは微動だにしない。

「終わりだ！ブルーノのブースト、ファロンでヴァンガードにアタック！スキルでパワー+3000、計32000だ！」

「ガード『アモンの眷属 クルーエル・ハンド』、『ヒステリック・シャーリー』、インターセプト『アモンの眷属 ヘルズ・ドロ』、『アモンの眷属 ロン・ジンリン』」

ギリギリで止める。

「ちいつ、ヨセフスのブースト、ローフルでヴァンガードにアタック！」

「ノーガード。『ヒステリック・シャーリー』ドロートリガー。パワーはヴァンガード。」

一枚ドロ―。」

「くつ、ターンエンド。」

「何とか耐えたか。」

「で、でもお姉さんは一枚だけ。対してあの人はあんなに。」

「そうだ！ 次のターンこそ君の最後のドロ―だ。さあ、引きたまえ！」

二人の視線がハンターにいくと。

フツ

.....

目を瞑り、笑っていた。

それは、ゾツとするようでいて、まるで天恵を受けたかのようなのだ。

「何がおかしい。」

「いえ。只、このカードが来るのを、待ってありました。」

見守るなか、彼女のターン。事実上のファイナルターンだ。

「ストライドジェネレーション。レインエレメント マデュー。」

レインエレメント マデュー P O W 1 5 0 0 0 + 1 0 0 0 0 0 = 2 5 0 0 0

現れたのは周囲に雨が降らせる精霊。

「マデューの登場時スキル発動。ハーツユニットのパワーが100000以下の場合、ドロップゾーンからグレード3のユニットを一枚を手札に。」

「フツ、今更リアガードを一体揃えても、なんの意味も無いね！」

「それは、此れを見ても？」

彼女のドロップゾーンから公開したカードを見て、シオンもリョウタも驚いた。

シュテイル・ヴァンピーア

「な、何だそのユニットはっ」

二人の様子に何も知らないユウヤは狼狽するのみ。

「これ知らないとは、やれやれ。ではその身を持つてお教え致しましょう。フウ・ジンリンを前列に。コール、シュテイル・ヴァンピーア」

シュテイル・ヴァンピーア power 10000

「シュテイル・ヴァンピーアのスキル。CB5、SB8。時を越え、今解き放ちなさい、

メガブラスト!!」

シユティール・ヴァンピーアから音波が溢れ、それがユウヤの領域を駆け抜ける。

「な、何だ!？」

「相手のリアガードを一体選択し、選択したユニットを強制的にスペリオルライドさせる。」

「なっ!？」

「私が選択するのは、グレード0、俊英の解放者 ウォルティメール」

アスクレピオの姿をしていたユウヤは、目が覚めたら、一気に体が小さくなつてしまつていた！

「ば、バカな。こんなことが！」

「あるんです。其がメガブラスト。」

多大なコストを払うことで、一撃必殺を与える。

「心配せずとも、私のターン終了時、ソウルから好きなユニットを選んでスペリオルライド出来ます。そして、ファイトルールをご存じかと思いますが、ガードフェイズに発生するガーディアンコールはヴァンガードのグレードによつて左右される。即ち、貴方はこのターン0とインターセプトしか出せません。」

その言葉に、ユウヤは口と目をこれでもかと見開き、信じられないと呟く。

「では、ヴラドスペキュラをコール。幕引きと逝きましようか？スペキュラのブースト、フウ・ジンリンでヴァンガードにアタック。スキルでパワー+3000」

「が、ガード！『剛刃の解放者 アルウィラ』、インターセプト！『解放者 ローフルトランペッター』」

「では、これはどうでしょう。マデューでヴァンガードにアタック。」

パワーは25000。クリティカルトリガーを引かれたら
・ ・ ・

その恐怖が、殆どのファイターが味わう場面に立ち会うも、悲しいかな。その人物は楽しむことも無い。

（ヒールは3枚。確率はある。ならば）

「の、ノーガード!!」

「では、イメージを運に。トリプルドライブ」

一枚目『アモンの眷属 ロン・ジンリン』

トリガー無し

リョウタは胸に手を当て動悸を静めるのに必死

「セカンドチェック」

二枚目『アモンの眷属 ヘルズデール』

トリガー無し

ユウヤは乾いた笑みを浮かべ勝利を確信する。

「サードチェック」

手にかける。

シオンは真剣にハンターを、その心を見ようとする。

そして、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

フツ・・・・

「パワーはシュティル、クリティカルはヴァンガードに」

「!!!」

三枚目『悪夢の国のダークナイト』

マデューの雨が嵐を呼び、ウォルティメールを吹き飛ばしそして、見えなくなった。

ユウヤのダメージチェック

5 点目『靈藥の解放者 エリクサー』、6 点目『軌跡の解放者 アスクレピオ』

「ぐ、くう……」

「お疲れ様です。」

「す、凄い……」

床に座り込むユウヤにハンターは歩み寄る。

「さて、ミスター。貴方に聞きたいことは只一つ。それで全て終わりです。」

「な、ななな、何だ!? さっさと答え!!」

ヒステリック口調のユウヤに言う。

「アラクネ、はご存じですよね？」

「!?ど、何処で其れを!？」

「!・・・アラクネ・・・」

リョウタ少年以外が其々反応し、ハンターも納得したのか立ち上がった。

「それが聞けただけで行幸。」

口をパクパクさせるユウヤにハンターは冷たく切り捨てる。

「では、惨めに、無様に、立ち去りなさい。」

「く、くううう!!」

悔しいのか、シオンとハンターを其々憎悪とも嫉妬とも取れる顔の後消えてった。

その際、彼が持っていたと思われるケースが置かれていた。

シオンが確認したのを見届けるとハンターは立ち去ろうとするのを、シオンは呼び止める。

「待ってくれ。貴女は……」

「ご免なさい、このあと予定があるので。では、ごきげんよう」

そう言い、本当に居なくなつた。シオンは思わず追いかけていく衝動だったが、リョウタ少年とカードの届けを先決とした。

（あの人は、いったい……）

『そうか。ご苦労だったな。これで確かな物になった。』

「はい。報告は以上です。それで、この後は？」

『アラクネは警察と普及協会に任せる。此方はこれでいい。お前には次のステップに移って貰う。』

「では……」

「ユナイテッドサンクチュアリ支部に所属の準備が整った。肩慣らしは終わりだ。」

「……いよいよですね。」

「詳細は追って通達する。それまでは待機している。」

「了解です、伊吹さん。」

「ではな、ハンター。いや・・・」

「鼓導ユウキ」

ユナイテッドサンクチュアリ編 TURN 4 合流と就任

『ねえ、ユウキは将来の夢ってある？』

『えっ？ううん。まだ何にも。』

『へえ。意外。ユウキって良く色々考えてるっぽそうだから、てつきりおまわりさんとかかと思っただけ。』

『さ、さすがにボクにはにあわないよ。』

『ユウキのかおじゃあ、ねえ？』

『な、なんでかおなの？』

『だって、もしはんにんがユウキのかわいいかおをみたとするでしょ。そしたらユウキのことをお持ち帰りしちゃうかもしれないじゃない（ニヤニヤ）』

『なんでお持ち帰り前提なの!? ボクはおとこなの!』

『はいはい。じゃあなにになりたいか、きまったらおしえてね? わたしの夢をおしえるから』

『? 今おしえてくれないの?』

『だーめ。ユウキが決まったらだから。』

『うん、わかった。』

『よしよし。じゃああそぼ!』

『うん!』

朝。

「ん、んん……」

思い瞼を開けるといつもの天井がそこに。

「夢、か……」

ムクリと起きると徐々に覚醒していき、意識がハッキリしていく。

時計を無意識に見るとまだ鳴る前だ。

夏が近いこともあってか、カーテンを開くと陽射しが差し込み、小鳥の囀りが聞こえ

る。

伸びをした後、顔を洗うため洗面所に向かう。

ジャー————

拭いて鏡を見る。

「……相変わらずの女顔だなあ。」

思わずそう呟く。

鼓導ユウキ。中学二年生。父親は仕事で単身赴任中。帰ってくるのは年に5回あれば良い方。

母は専業主婦。時々父の元に行くことあり、

「つて、誰に説明してんだろ。」

そう言いながらリビングに行く。

「おはよう、母さん」

「おはよう、ユウキ。今日は少し早いね。」

ボクの母さん、鼓導アヤメ。

いつも穏やかで暖かい笑顔でボクや父さんを支えてくれている。

料理はおいしいし、自慢の母だ。

「いただきます。」

「はい、召し上がれ。」

ボクの父さんの海外出張が決まった2年前、この家を買ひ、二人での生活も慣れた。

二人とも居ない時は一人で家事も出来るようになった。

正直、彼奴が居なかったら最悪コンビニ生活は考えたかも。

「そう言えば、そろそろ地区大会ね。」

「うん。明日もその関係で少し忙しくなるかも。」

そう、と呟く。正面を向くと母さんが真剣な表情で見ている。

「ユウキ」

「ん?」

「無理はしちやダメよ。」

その言葉はこれからボクがやろうとしていることからだろう。母さんは知っている。だからこそ頷いた。

「勿論。十分に気を付ける。」

御馳走様と言い、部屋に戻る。

「大丈夫、何があっても私はあなたの味方だから……」

そろそろ衣替えが恋しい季節になりながらも準備を終える。

ふと、勉強机の上に飾っているモノに目を向ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今朝の夢を見て思う。自分の夢。何より、その先の事。

「行ってきます。」

そう言い歩き出した。

さあ、今日も1日頑張ろう。

ユナイテッドサンクチュアリ編 T U R N 4 合流と就任

授業も無事終わり、掃除も終わった。

明日までやることは殆ど無い。つまり、オフだ。

活動の必要はない以上、好きにしよう。

・・・そう思っていた時期がボクにもありました。

カードキャピタル2号店に、何故か来てる。

「え？今何て言った？」

「・・・・・・・・」

ボクと面と向かつて居る赤髪のグルグル頭の少年が言いたくなさそうにしているなか、緑髪の活発そうな少女と金色の少年がジト目で彼を見る。カウンター席にいる此処のアルバイト店員の葛城カムイさんと店長の新田シンさんが苦笑しながらも眺めている。

そんな中、

「だから、『名前はまだない』。」

「・・・・・・・・・・はあ」

思わず溜め息。

「し、仕方ねえだろ！決まってねえんだから！」

そう叫ぶのは新導クロノ。学校内じゃあその見た目から周囲には警戒されがちだが至って普通の中学生だ。1年の頃からの知り合いで、料理を教えてくれていて、たまにお互いの家へ足を運んでいる。

母さんとクロノの叔母のミクルさんの仲も良好だ。

ミクルさんと呼び親しんでいる。

「とにかくだ、君が先ずグレード3にならなければ、何も始まらない!」

「焦んなくとも直すぐなれるっつーの」

「すぐって何時? 何月何日何曜日?」

「・・・小学生かよ・・・」

(これに地球何周したらを加えるべきか・・・?)

最初に言うのは綺場シオン。日本有数の企業、綺場HD（ホールディングス）の跡取りだ。

彼とは良くカードキャピタルで知り合ってから何度かファイトしている。

その関係でクエストに協力したりもしている。

そのクロノにムスツとした表情で何か言いたげにしているこのショップ内紅一点の子がいる。

その少女、安城トコハ。

学校でも活発な性格とひた向きに頑張る姿勢が強みの少女。

ヴァンガード経験は正直ボクよりも恐らく上だろう。

兄のマモルさんは普及教会に所属するかげろうのクランリーダーで、ドラエン支部にいる。

凄いい忙しいらしく、以前手伝った際ゲツソリしているのを見たことがある。

トコハともファイトはしている。

その関係上彼女の友人でヴァンガードを始めたばかりの岡崎クミとも話す。

で、クロノのファイカを確認したところ、もうすぐグレードアップ間近なのは確かだ。

「だったらさっさとグレードアップしちやいなさいよ！」

「だったらさっさとクエスト行かせてくれよ！」

「じゃあさっさと探さないよホラ」

「お前らが行かせてくれねえんだろ!？」

この有り様である。尚、元々この二人はこんな感じだ。トコハのガッツと積極性の前にクロノだろうと関係ないらしい。

トコハから用があると言つて連れてこられたのだが、それをカムイさんに聞いた。昨日三人にチームを組んだようで（話の限りは組まされた）。

色々試したのだが、お互い主義主張が強いのと、ヴァンガードでの想いが強い結果、チームとは言えない有様。

更に結成直後とはいえ、その場に居合わせたトリニティドラゴンとの変則チーム戦では全く息合わせることなく敗北。

そのことをカムイさんにダメ出しを食らい、お互い気に入らないと口にしながらチームをやつてやると気合や負けず嫌いが3人揃ったことからこうして続いている。

で、だ。

「・・・何でボクが呼ばれたの？」

率直な疑問だ。3人が結成したのなら、どんなにいがみ合おうが、チームだ。少なくとも余人が介入して良いものではない。

「新導が手っ取り早くグレード3になるにはどうしようか考えていたんだけど、綺場の案でいいか聞きたいのよ。」

トコハが当然の如く言い、「で、どうなの？」という目でこちらを見てきた。

ふむ。カムイさんやシン店長に聞かない辺りらしいが・・・

「多分、綺場も考えていると思うけど、大会まで1ヶ月を切っている以上、ぐずぐずしていられない。なら、ミニ大会で一発取るか、小さいクエストを集中的にこなし、確実性を求める。この二択だね。」

前者は、初心者でも、ファイトに自信があるクロノにはもってこいだ。

「うん。やっぱりこの二つね。」

綺場、と声を掛けるとシオンは丁度検索が終わったのかあるサイトに目をつけていた。

「・・・」

ユナイテッド・サンクチュアリ支部でのミニ大会のお知らせだ。

（よりにもよって、ね。）

そう心の中で呟きながら、目の前で繰り広げているチーム名決め争いを眺めていた。

方針が決まり、シオンは家の都合で。クロノはスーパーの特売。トコハはデツキの調整で帰った。

「さて、と。」

カムイさんが真剣な表情でこちらを見ている。

「ユウキ。今回出場を見送った件は理解した。お前が何かしていることは、なんとなく分かっている。」

それで、と切り出した。シンさんは倉庫整理をしている。

「何を、しようとしているんだ？お前は。」

怪訝そうに、それでいて心配そうに聞いてくることは予想していた。

その上で答える。

「すみません。少し個人的なことになっちゃって・・・言えないことが多いです。」

目を瞑り、言葉の整理をする。

「でも、自分の意思で決めたことは間違いありません。母さんにも相談しました。」

だから、と紡いで目を開ける。

「いつか、必ず話します。それまで待っていてもらえませんか？」

トパーズ色の瞳には強い意志が表れていた。

「勿論、クロノ達には内緒で。」

「信じて、なんだな？」

「はい」

即答且つ強く言い切った。

それは絶対言える。伊吹さんは少なくともそうする。

本当に大事なことはまだ言えない。でも、迷いはない。

それは言い切れる。

「・・・分かった。只、くれぐれも気をつけろよ。」

悩んだ挙句、そう締めた。

「ようし、じゃあ今日は久々にファイトでも「ゴホン!」・・・の前にレジに行かないとなあ・・・」

いつの間にか後ろにいた店長に見とがめられ、去っていくのを苦笑してみた。

シンさんはこちらに向いて改めて話す。

「何かありましたら、何時でも来てくださいね。」

「・・・ありがとうございます。」

本当に、有り難い。

この人たちの思いを裏切らないためにも、頑張っていこう。

数日後、ボクは在る場所にきていた。

最新の設備が整った塔が眼前にそびえ立つ。

ユナイテッドサンクチュアリ支部。

ヴァンガード普及協会の施設の一つで、惑星クレイをモチーフにしている。

所属しているクランは6つ。ロイヤルパラデイン。オラクルシンクタンク。シャドウパラデイン。ゴールドパラデイン。エンジェルフェザー。ジェネシス。

人型、ノーブルが多い。

只、現在この地は色々な噂がある。

それも、余り良くないものだ。

早速入り、支部長室に案内された。支部長の神崎ユウイチロウだ。この人はカリスマ性とファイトの腕前から多くのファイターから絶対的な支持力を持っている。

世が世なら、天下すら取れるだろう。

彼の思想は弱肉強食の如く、実力主義。

それは道理だ。間違っではない。きつと、間違いかもしれないがそうとも言えない。謂わば可能性の一つだ。そして、僕は伊吹さんの部下として動くことになり、当分は支部の事務処理をやることになる。伊吹さんは只でさえデイマイズの指導や普及協会との連絡役に出たりと忙しい。つまり、僕は繋ぎ役。まあ、丁度いいのかもしれない。そうして、僕の事務仕事に追われた。

「クロノが、いない?」

『うん』

数日後、シオンから連絡があり、予定していた大会に出場したのだがトラブルが発生した。

一部のファイターチームが不正をし、摘発されたのだがその過程でクロノがファイカのポイントが無くなってしまった。

しかもクロノはヴァンガードを辞める旨をカムイに話し、何処かへ行ってしまった。

それで、クロノが僕の方に来てないかとシオンから掛かってきた。

「いや、こっちでは見てないよ。でも、」

『でも?』

「意外と、近くに居るのかもね。」

そう呟きながら、午前中のことを思い出す。

『明日は夕方に戻る。少々掛かりそうだな。』

『分かりました。こちらはどうすれば？』

『もし葛城が掛かってきてもそのままです。』

『了解。』

全く、我ながら酷い人間だと自分に悪態つきながら、休憩がてら自販機に向かう。

此処の施設では、より強力な力を得る目的の人で溢れかえっている。

夢は脅迫観念に変わり、ファイター達は日々苦痛と勝利を得ていく。

正直、いい感情はもてそうにない。

「大変そうだね。」

「……どうも。」

面倒なのに会ってしまった。

東雲シヨウマ。ユナサン支部が誇るチームデイマイズのメンバー。
クランはジェネシス。

一見するといいい人そうに見えるが、実際は変わり者だ。
正直、残りの二人の方がまだいい。

エンジェルフェザー使いの羽島リンは普段はダンマリ。もう一人の刈野スギルは短期で損気。

どうしたらああなるのか。

何れにしても、この人は何を考えているのか分からない。
それに、僕の中で何かが警告している。

この人に近づくなと。

「君も苦勞するね。伊吹さんは君が来て以来益々忙しくしていらっしやるみたいだ。」

「伊吹さんは人気者ですからね。仕方ないことですよ。」

「そう、受け入れる君も凄いよ。君自身はいいのかい？このままで。」

「何がです？」

「まるで、ナニカが足りないみたいな。」

何が恐ろしいかって？

恐らく、後に彼に詳しい少年が居たらこう言うかもしれない。

空虚だって。

人は誰しも、なりたいたい自分、つまりイメージが生まれる。

これは、空想、妄想にも該当する。

だがそれが無い場合、それはどうなるのだろう。

「・・・それは、貴方もそうなのでは？見た所、所在なさげな感じですけど。」

「フフ、これは失礼。願わくば、次の予選で良い相手が来ることを願うよ。」

そういい、放り投げたコーヒー缶は宙を舞いながらゴミ箱のポケットに入り、東雲シヨウマは去っていった。

「・・・多分、遭えると思いますよ？貴方の運命の人は。」

呟いて暫くした後、彼は我に返りながら部屋に戻った。

何故、と思うことも無く。

暫くした後

シオンの連絡と伊吹さんの帰還で、一先ずクロノの件は片付いた。どうやら直接会ったみたいだが相変わらず名前は名乗っていないみたいだ。それに、彼らも何とか無事に予選に進めた。

チーム名も、決まったみたいだ。

「で？二人に心配かけた上に、何とかギリギリ行けたんだ。」

『ああ、騎場がお前に連絡してたっていうから、一応な。』

「大したことはしてないよ。変な所で律儀と言うか、何と言うか。」

『うるえせえ。て、何でそんなこと知ってんだよ。』

「シンさんに偶然会った時に教えてくれたよ。」

ああ、と返す声を聴きながらユウキはカレンダーを見る。

「・・・」

『ユウキ?』

「ん、ああ。どうしたの?」

『いや、どうしたって予選は見に来てくれるんだろ?』

「勿論。応援に行くから、予選気張っていきなよ。」

『おう。後、いつかファイトしてみないか？ラウンダー？とかも興味あるし。』

「・・・ああ、必ず。」

騎場から聞いたのかな。

まあなんにしても、此処からだ。

通話モードを終えた携帯を見つめながら一人愚痴る。

「先ずは、予選を乗り切らなきゃ。」

携帯のメールには描いてあった。

アラクネに警察介入 確定

「・・・フム。ここまでは順調だな。」

「しかし、やはり彼ではやはり役不足がすぎるな。」

「・・・仕方ない。少し手を加えよう。」